

佐伯とお金

佐伯にはお金があったか？

佐伯祐三は周蔵から援助を受ける必要はなかった。これは父の遺産相続として実家からのお金が十分あったこと、また第2次渡仏のときや佐伯の絵が売れていたためである。佐伯の渡仏にあたり、白川朋吉を会長とする画会が組織された。4号1枚現物と引き換えで200円で買ってもらうことになっていた。20号の場合は100円後払い。私はやっと3枚を親戚に買ってもらったが、白川のほうはすこぶる成績がよく6,000円の会費が集まった。当時の私の毎日新聞社の月給は90円であった。(坂本勝) また次の新聞は佐伯の絵がパリで売っていたことを示している。

1991年01月17日 00:00:00 共X099外信217

◎佐伯祐三の作、パリで発見 モンパルナスの裏町描く

【パリ十七日共同】日本の近代洋画の代表的画家佐伯祐三の知られざる作品が十六日、パリ北東の郊外、ポントワーズ近くの美術倉庫に埋もれているのが見つかった。この作品はパリのモンパルナス周辺の裏町を描いた20号(縦六〇センチ、横七二・八センチ)の油絵で、佐伯画伯に詳しい美術評論家の朝日晁氏(62)＝東京都大田区田園調布本町＝がこの日、倉庫で本物であることを確認した。

特徴のある自家製のキャンバスや、糸くずを絵の具の中に塗り込めたような独特のタッチ、サインの表記から見て「一九二七年の暮れごろに、死を前にした激しい執念で取り組んだ作品」と同氏は話している。

朝日氏の推測によると、この作品は、制作直後に、ブルターニュ地方出身でモンパルナスに住んでいたフランス人船員が画伯から直接購入したらしく、画伯の米子夫人(故人)も生前、これを裏付ける思い出を語っていたという。

船員の死後、パリに住むいとこの女性が絵を受け継いだ。昨年ブルターニュ地方へ移るに当たって、ルノアールなど所蔵の絵を放出。その中にこの作品も含まれていたとみられる。絵の裏側にはフランス語で「日本人画家佐伯の作品アベニュー・ド・メイン。佐伯は一九三〇年(注＝実際は二八年)パリに死す」と記してあった。

佐伯祐三はパリを描いた最高の日本人画家といわれ、二八年八月に三十歳の若さで死ぬまでに二回渡仏。ブラマンクやユトリロの影響を受けながら主に灰色のパリの冬景色を死の直前まで描き続けた。また祐三は兄に金送れという文章を残している。

佐伯祐三の兄へのハガキ

消印は1924年6月25日クラマール

その後はご無沙汰しました。この頃は如何御暮らしですか。こちらはもう御金がなくなって困っています。こんど御金がきたら一日何金かきめてそれで生活スルツモリです。沢山御金をつかった事を非常に悪く思っています。パリーのこの夏は大変涼しくて冬服でないと寒い日はいくらかもあります。別にヒシヨに行かなくてもよい気候なのでパリーもヒシヨに行く人は少ないです。私たちは来月でこの家をきり上げて南フランスへ十月一日に行くつもりになっています、そこで四、五ヵ月おくります。生活費はここよりかかりません。田舎ですから伊太利の国境に近いところです。只只お金のつくのをまっています。それではお身体を御大切に。この絵ハガキはパリーで有名なマドレーンと云うお寺の画ハガキで

す。

ソムラールのホテルから祐正宛葉書 1924年11月29日
十一月二十九日 巴里にて

一週間以前より巴里に来ました。田舎を引き上げて只今ソムラールに居ますが二、三日の中に宿を変えます。さて今自分は米子が病気の為金が必要で、二月初めにいただく御金を一月のはじめに電報カワセでおくって頂きたいのです。おり入って御願います。理に合わないでしょうが実に困りますから、必らず御願いたしたいです。田舎の方が経済にいいはずですが、米子が病気のためやむなく巴里にいます。一月から又田舎へ入りたいと思っています。よろしく御願います。この手紙つき次第巴里しゃとうだん日佛銀行方佐伯祐三にして下さい。字かずが少すくなくなりますから。

注 日仏でなく日佛となっていることに注目。パリ日記では阿弥陀仏となっていて、佛がつかわれていない。

2. 佐伯にはお金があったか？

坂本勝、山田新一の著書、佐伯の他の友人の文章から佐伯にはお金はあったことがわかる。それに対して周蔵のほうはどうだろう？「自由と画布」の第2号の「訂正」というページ。阿王氏が私に何度も質問されたことの一つに、周蔵の金銭の動きの確認でした。ひとつには、周蔵が大正8年ころから昭和3年頃までに、佐伯さんに都合するだけの、金銭に対する力があったかどうか。二つには、周蔵が父、林次郎に無心した場合、それに対応できる、処分するなりの資産があったかどうか。三つは、資産があったとして、先祖から継いできたものを林次郎が、処分してまで用意したかです。

美術界に縁のなかった私は、これは大変面倒なことに巻き込まれてしまった、と思いました。思えば私が阿王氏に相談したわけですし、ここは面倒になる前にいちはやくこのことは取りやめようと思いました。

(中略)

私より20才近く上のいとこと、周蔵の一番下の弟の未亡人が健在だったりして、私の記憶違いが少し解明できましたが、吉園の生家ではいまだ財産を失くしたと周蔵の行為を怒っていることを知り、正直、私は仰天しました。

(中略)

周蔵は、当時としては大変な資産を売り払うことに専念したようですし、

(中略)

私が疎遠だった叔母やいとこたちは、いまだに周蔵を許してないこと、憎悪しているということ、今回改めて知ることになりましたが、数人いる周蔵の甥の中の唯一人だけが、こんなことを話してくれました。

伯父さんは進歩的ないい人でした。金銭を使ったと言っても、それは父親が許したことだから、誰も異論を言うことはできないのです。

自由と画布第4号

「佐伯祐三さんに協力を惜しまなかった人物は母方の親戚の若松家である」として突然若松忠次郎の話がでてくる。彼が周蔵の求めに応じて金を与えた。落合氏は「自由と画布」

は参考にするものではないと言われるが、ここまで書かれているものを無視していいものだろうか？これらの「自由と画布」に書かれている資金については武生市の調査によって全て否定されている。その後、落合氏の本が出て、金の出所は、周蔵がスパイであり、彼の麻薬作りによって佐伯にわたす金ができたといいふうに話が変わっていく。